

筑波大学の時間は輝いていましたか？

著者	名波 弘彰
雑誌名	文学研究論集
号	21
ページ	7-8
発行年	2003-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/10233

筑波大学の時間は輝いていましたか？

名 波 弘 彰

阿部軍治先生の退官に当たって、わたくしに一筆ということで、つたないはなむけの言葉を贈らせてもらうことにします。本来先生はソヴィエト文学・ロシア文学の専門家として本学に赴任されたと聞いています。が、その専門の豊かさにはとうてい触れえません。なにせ外国文学にまったくうとい日本古典文学研究の徒の耳に入る情報ゆえに、先生の学問の真価に触れえないはがゆさを誰よりも実感しています。

ただこの筑波大学では、一般文学、のちに改名して総合文学のコース（領域）の同僚として長年一緒にコース（領域）の学生・大学院生の教育にたずさわってきたという点で、先生の教育者としての側面を語る資格を持つことだけはいえるでしょうか。

このコース（領域）においてなによりも実感されるのは、学問対象と方法、それに結論に求める価値観が学生・院生と教官の間で大きくずれてきていることでした。そのずれに時代の学問観の推移を見てよいのかも知れません。先生が一番ご存じでしょうが、わたしどもにとってはロシアの文学、日本文学はそれ自体で文化の精粹として輝く対象でした。かつて日本では、ちょっと気取っていえば、カフェの一角に陣取ってトルストイ・チェーホフ・ドストエフスキーを語ることは、文学の真実に身をゆだねるほどの陶醉と興奮の貴重な時間でした。とるに足らぬわたしの経験ですら、そうですから、まして阿部先生がそれを学問とされているというのは、うらやましい限りというべきでした。幸福な時間を別個の土地で共有したかも知れないという、ある種の親近感がわたしと阿部先生との間にあったと信じています。しかしその甘美な共有感は現在の大学ではもはや何の価値もなくなってきています。とりわけ院生の追求する学問は、いわゆる文学青年の求めるようなナイーブな文学観ではありません。

文学は異化された構造体としてかれらの前にあるとすれば、かれらはまずその構造体との距離を測ることから学問を始めます。この感覚は、まして留学生にとっては当然の態度かも知れませんが、日本の院生にとっても共通しています。つまり、

日本人にとっても、ロシア文学は日本近代文学の土壌としての“内なるもの”の感覚を失っているのでしょうか。

わたしも教官は、このような学問観の大きな変貌のなかで学生の指導にともにたずさわり、いま先輩たる阿部先生の退官を迎えたのです。ともに苦勞して学生を育てて来た同僚でした。文学・文化の研究といえども、時代とともに進化することを肌で実感しながら、学問と格闘し、学生をどう伸ばすかで苦勞してきた体験の共有という点からすれば戦友といえるかも知れません。情熱と生命（＝生涯）を懸けてきたという意味での「戦友」です。先生は学問が不断に変化する姿を学生・院生に伝えようと奮闘してくれました。いまふりかえりますと、誠実で温厚な人柄ということばがわたしの頭をよぎります。

先生の人生にとって筑波大学での研究と教育での格闘が価値のある時間の輝きであった、と言ってくれることを祈って……。